電子メールを利用した日本語通信教育と教師養成

筑波大学文芸・言語学系　　石田敏子

I.　目的

最近コンピューター用システムソフト（コンピューターを動かすための基本的なソフトウェア）Dos/Vが開発され、これと日本語のワープロソフトを併用すれば、どの機種でも漢字仮名交じり文が書けるようになった。また、NEC,Dos/V用ソフトの日本語WordPerfectには電子メールで送るためのファイル変換のコマンドも含まれている。

このような状況のおかげで、電子メールで日本文を海外と交換することが特にコンピューターの素養を持たない日本語教師でも比較的簡単にできるようになった。電子メールのためには、ＩＮＴＥＲＮＥＴ、ＴＥＬＮＥＴなどの学術情報交換のための通信網が国際間に設けられ、学術的使用に限り、無料で利用できる。

国内の日本語教師養成課程の学生たちにとっては、日本語教育の現場に触れる機会はなかなか得られない。一方、海外の日本語教育では、日本語教師が得にくい。もし、コンピューター通信によって、海外の日本語教室と国内の日本語教師養成課程とを結び、両者間の交流ができれば、上記のような問題を解決する一助になるのではないだろうか。これがこのプロジェクトに着手した動機である。

電子メールの利用には種々の可能性が考えられるが、日本語教育において、日本人教師を最も必要とするのは、作文教育である。まず、この分野での電子メールの利用及び日本語教師養成の可能性を探ることを第一段階の目的としている。

ここでは、主として、メール交換の手順と現在までの経過及び今後解決すべき問題点について述べる。

II.　電子メールを利用した語学教育の試み

電子メールによる外国語教育は英・独間で試みられた報告がなされている。これは、電子メールを利用した教育が外国語の作文力及び語彙力の習得に与える効果、個人が直接情報交換をすることが異文化理解に与える影響、教室活動への電子メールの導入は適切かどうか、電子メールを利用するためのグループ活動の利点と欠点を知ることを目的として４週間行われた。事前、事後に実施されたアンケート及びテスト結果からは、電子メールの利用は語学力の面でも異文化理解の面でも好結果をもたらし、参加者にも好評であったと報告されている（Austin,R.&F.Mendlick 1993）。

東京大学とトロント大学間では英語の作文と日本語の作文の交換が試みられた。作文は各大学のクラス担当の教師が添削を加えるが、手紙はそのまま、東

京大学ではクラス担当者が、トロント大学は助手がまとめて電子メールで送受信する形態で実施された。学生の学習意欲の向上に役立ったという報告がまとめられている（鈴木博1989ab、1994、中島和子1993）。

筑波大学では、海外の日本語学習者の作文を同大学の日本語教師養成課程の学生が添削すると同時に、手紙を交換するという形態で行われている。

III. 日本語文の交換

電子メールの手順にはいろいろあり、しかも急速に簡素化されている。ここでは、本プロジェクトで採用している手法について紹介する。記録のため、フロッピーディスクに保存することを前提とする。

コンピューター通信では、アルファベットは「７ビット」で送受信されるが、漢字仮名交じり文の送受信には「８ビット」を必要とする。そのため、アルファベットを使用した文はそのまま送受信されるが、日本語文は、一般的には、「８ビット」のファイルを「７ビット」に圧縮して送り、受け取る側ではそのファイルを再び「８ビット」に変換して読まなければならない（国内では、日本語文をそのまま処理できるメールサーバーが増えてきている）。今までは、コンピューターの機種によっては、特に開発されたワープロソフトでなければ日本語の出入力が不可能であったのと、この「７←→８ビット変換」が難しかったのとで、電子メールによる日本語文の送受信は特にコンピューターに詳しく、メール交換に興味を持つ人たちの間でしか行われなかった。

現在では、日本からワードプロセッサー（機器）を持っていかなくても、前述のDos/Vや漢字トーク７と日本語処理用の市販のワープロソフトを併用すれば、現地のコンピューターがそのまま使えるわけである。しかし、キーボードが日本のコンピューターとは違うので、機能キーは特別な使い方になる。 電子メールを送受信するためにはその機関でメールを処理している大型のコンピューター（メールサーバー）と自分のパソコンとをつながなければならない。一つはＬＡＮ（Local Area Network大学構内、工場内等の特定地域の通信網）につなぐ方法であるが、これは、パソコンのある建物内に線が来ていないとできない。もう一つはモデムを使って電話線を利用する方法である。

日本語文は、先方のサーバーが日本語文の受信ができる場合にはそのまま送受信する。できない場合にはWordPerfect J（NEC、IBM用）のKermit←→Textファイル変換用プログラムやUUEN（DE）CODE（NEC,IBM,UNIX用），EUDORA（Mac用）などを使用して送受信する。（メール交換の技術的な問題については石田敏子(1994)を参照されたい。）

本プロジェクトでの受信から返送までの基本的な手順は次のようになる。

(1) 簡単な自己紹介の手紙に続いて、作文が送られてくる。
(2) その作文をこちらの教師がフロッピーに保存し、学生に渡す。
(3) 学生はコンピューターセンターまたは自分のコンピューターを使用して

添削し、説明と簡単な手紙を添えてフロッピーに保存し、教師に返す。

(4) 教師が「添削」と「解説」に目を通し、適宜訂正して、メールで返送する。

(5) 訂正された「添削」と「解説」のフロッピーを学生に渡す。学生は訂正された部分を確認する。

IV. 1994年6月までの経過

1．1993年3月から6月にかけて筑波大学と英国スターリング大学との間（NEC-Mac）で電子メールによる日本語文交換の技術的可能性を確認した。

2．英国の２学生を対象として、作文の送受信と教師による添削を試行し、メール交換の手順と適切な添削方法を検討した。その結果、向こうからは作文と手紙を送り、こちらでは作文を添削し、添削の説明と添削をした学生の手紙とを送ることになった。

3．同じ作文をこちらの大学院生に添削させ、学生の反応を観察した。また、「日本語教育評価法」の学年末テストの一部として同じ作文の添削を出題し、学部学生の反応を見た。どちらの場合も学生は興味を示し、添削と解説もまあ満足できるもので、プロジェクト続行の可能性が確かめられた。

3．同年7月から12月まで、オックスフォードに滞在する機会を得、研究費も確保できたので、同大でアメリカ英語キーボードのIBMコンピューターで、Dos/VとWordPerfectJを使用して日本語処理を試みた。このコンピューターで書いた日本語文の電子メールを筑波大との間で交換し、特にコンピューターに強くなくても日本語文を海外のコンピューターで書き、送受信のできることを確認した。また、この間に他大学との間にもネットワーク拡大の話し合いを持った。

4．1994年1月以降、スターリング大学との間で定期的に日本語文の電子メールを交換し、同大学院集中日本語コースの学生の作文を筑波大学日本語教師養成課程の学生が教師の指導の下に添削して、送り返した。スターリング大学では、助手が学習者の作文の送受信を手伝った。筑波大学では、ワープロが使え、このプロジェクトに興味を持つ学生を募集した。学生たちは第一学年度にメール交換の基本的手順は教えられているので、リーダー格の上級生が学類（学部）のコンピューター室及びコンピューター・センターの使い方の指導をした。メールの送受信は教師が行い、７人の作文を３人が添削している。

5．オックスフォード大では、1994年1月以降、先方の教師がメール交換の技術を習得し、筑波大学との間のメール交換の技術的問題の解決をはかりつつある（NEC-IBM）。同大学の日本語教育プログラムは今年から改編されるためまだ学生の参加には至っていない。

6．ダーラム大学では、電子メール交換のために、容量の大きいIBMコンピューターが新しく設置され、現在、今秋からのメール交換の技術的問題及び

運営上の手順についての検討が行われている。

V. メール交換上の問題点

これまでの試行過程では次のような点が観察された。

1. 技術的な問題

メール交換に関する技術的な問題は日進月歩の勢いで解決されつつある。一度交換のシステムが確立されてしまえば、後は自動的に進めることができる。最も重要なのは、双方に人材を確保することとコンピューター・センターとの連絡を密にとることができるかどうかによる。日常の手順は日本語教師でも簡単にこなせるが、システムを確立するまでと何か技術上の問題が起きたときにはやはりコンピューターの専門家の手を借りなければならなくなる。

現在は、フロッピーを学生に渡して添削を行う手順をとっているが、コンピューター・センターの学生用コンピューターを使用して、学生が直接作文を受信し、添削を加えてファイルとしてサーバー上に保存し、それを教師がチェックするという手順にすれば、より迅速にメールの交換ができる。そのためには、やはりコンピューター・センターの協力が必要になる。

学生達は文科系であってもコンピューターの使用法にはすぐに熟達し、技術的にも自分達で研究したらしく、教師より詳しくなった。

2. メール交換実施上の問題

どのような共同研究でも言えることであるが、相手方のキーパーソンとして熱意のある日本語教師の参加を望めるかがかなり重要なポイントとなる。助手が得られるかどうかも担当している授業負担との兼ね合いでは、重要になってくる。

東京大学ートロント大学間のプロジェクトでは、双方がコースとして成立させた形態をとって行われた。日本とヨーロッパの大学間では学期のずれがあるため、コースとして成立させられるかどうかは疑問である。コースの一部または特定の期間に限って行う形態の方が成功する見込みは高いのではないかと思う。今後は、時差の少ない国とのreal timeでのメール交換の可能性を確かめたいと思っている。

VI. メール交換の成果

まだ短期間の実施のため、作文力の育成に役立ったかどうかは評価できないが、スターリング大学の日本語学習者を対象に行ったアンケート結果では、学習意欲を高めるという点で好評であった。大学院生であるためか、日本に対する関心は非常に強く、手紙の中では常に話題を投げかけてくる。日本の学生たちは異文化理解という点で、このような手紙の交換に興味を持ち、多くを学びつつあるようである。短い間をおいて、直接個人的に送られてくる異文化に関する新しい知識の与えるインパクトは大きい。Austin,R.&F.Mendlick (1993)

は北アイルランドとドイツという比較的近い国の学習者間での異文化理解にも、瞬時に送受信できる電子メールが強い影響を与えたことを報告している。

日本語教師養成課程の学生による添削は彼らが学習者のレベルを理解するためには確実に役立っている。最初に持ってきた「添削の解説」は非常に難解であったが、順を追って分かりやすく、簡潔になった。教師にとっても、教壇実習での教授技術の訂正には慣れているが、作文の添削の訂正をする機会はあまりない。その点で、教師にとっても学ぶところが多かった。

今後、日本側の学生を対象としたアンケートをとる予定にしている。

現在では作文教育の分野に限っているが、文法教育や読解教育などにも展開することは可能である。このような形での日本語教育及び日本語教師養成も今後は考えられてよいのではないだろうか。

1994年10月からは、日本で添削に当たっていた学生がスターリング大学に行き、今度は作文の送信に従事することになっている。4年間の日本語教師養成課程を終えても日本語教師としての就職口が極度に限られている現在、学生に「夢」を与える意味でも、このプロジェクトが役立てばうれしいと思う。

参考文献

(1) Austin, R. &F. Mendlick. 1993"E-mail in Modern Language Development". ReCALL. No. 9. (University of Ulster, Northern Ireland):19-23

(2) 石田敏子1994「電子メールを利用した日本語通信教育」第七回日本語教育連絡会議総合報告書（出版予定）

(3) 鈴木博1989a「BITNETを用いた英語教育」『1988年度研究報告　東京大学教養学部パートナーシップ・プログラム』東京大学教養学部社会科学科　日本アイ・ビーエム株式会社Academic Information System ACIS REPORT NO. 6:71-77

(4) 鈴木博1989b「コンピューター通信利用の作文指導の試み」『大学英語教育学会1989年度（第28回）全国大会要綱』：136-137

(5) ―――1994「国際電子メール利用の英語作文指導6年間の総括」（最終講義要旨）

(6) Nakazato, Y. 1993. Using Japanese On Your Mac a resource guide. Dept. of Chinese & Japanese. Scool of Languages & Linguistics. Georgetown University, Washigton

(7) 中島和子1993「パソコン通信を活用した日本語教育」『日本語学』Vol. 12 No. 13:22-30